

2022年10月30日 降誕前 第8主日礼拝

メッセージ「きみはその幻を見たか」

岡嶋千宙伝道師

聖書 ハバクク書 1章1-4節、2章1-4節

いきなりですが、みなさんは、今朝、何を食べましたか？ わたしは、毎朝大体同じで、今日も、大豆ときな粉入りのヨーグルト、生姜ミルクティ、チーズ、それと、季節の果物リンゴ、という朝食でした。では、次の質問です。朝起きてから今まで、水を使わなかった、という人はいるでしょうか？ トイレ、洗顔、歯磨き、お料理など、おそらく、全く水を使わなかったと答える人はいないでしょう。水、食べ物、飲み物。わたしたちの日常にとって不可欠です。もし、次の瞬間になくなるとしたら。食料が尽きて、水が枯渇する。はるか遠い昔のことでも、どこか遠い国のことでもありません。

2019年の冬以降、新型コロナウイルスの感染拡大により、世界中の国々で都市の封鎖、ロックダウンが行われました。日本でも、海外ほど厳しくはないですが、外出制限・行動規制が敷かれ、食料不足にならないように、許容範囲以上の備蓄をしようとする動きもありました。また、ウイルスに感染してしまったら、より厳しい行動制限が課され、食料品がなくなっても買い物にいけず、短い間ではあったとしても、ひもじい生活を強いられる、という話を聞くこともありました。現在は感染拡大が下火になっていますが、追い討ちをかけるかのように、今度は物価が上昇し続けています。そのわりには収入が増えない状況で、生活必需品を確保することがますます難しくなっています。水についても、日本は雨季のある島国で、水質資源が豊富ではありますが、大気汚染などを原因とする気候変動によって、今後、どこまでその資源を確保できるのかは定かではありません。海外に目を向ければ、ウクライナをはじめ、各地で、紛争が繰り広げられています。異なる宗教、思想、文化を持つ勢力同士の争いの背後で、一般市民が犠牲になり、避難所で少ない食料と厳しい環境のもと、苦しい生活を強いられている、という報道をよく耳にします。さらに、紛争が長引くことにより、核戦争が現実化する恐れも高まっています。人為的にせよ、自然に基づくものであるにせよ、わたしたちの生活環境がより一層に厳しくなり、これまでの日常が成立しにくくなっている現代の世の中。今、この時代を、どう生きるべきか。何を考え、何を思い、何をなすべきなのか。神の独り子であるイエスを信じる者として、どんな姿で今を生きるのか。

本日与えられた「ハバクク書」の御言葉^{みことば}。おそらく、教会であまり取り上げられることのない書物で、はじめて聞いた、という方もいるかもしれません。聖書を手にとって、迷うことなく即座に該当ページを開ける人は少ないと思います。そう言うわたしも無理です。旧約の前から35番目、後ろからだて5番目に収められた、たった

3章しかない短い書物。1章1節にある通り、ハバククという預言者が記したものです。名前の他に、この預言者についての記述はなく、また、時代についても明確に特定できるものは記されていません。ただ、おおまかな時代としては、1章6節に「カルデア人が興る」という表現があることから、紀元前7世紀後半、現在のイラクのある地域を中心に台頭した新バビロニア帝国が勢力を伸ばしているときであると想定できます。これまで、何度か「エレミヤ書」を扱ってきましたが、それと同じくらいの年代です。「エレミヤ書」の復習にもなりますが、当時、舞台となっているユダヤの国、ユダ王国は、外交上も内政上も、不安定な状況に置かれていました。新バビロニア帝国の前に、その地域で覇権を握っていたアッシリア帝国の攻撃を受けた周辺諸国から、ユダ王国に向けて大量の避難民が押し寄せ、異なる宗教、文化、生活様式を持つ人たちの間で軋轢^{あつれき}、格差の拡大、対立が深刻になり、また、それと同時に、新バビロニア帝国からの圧力が激しくなり、国中が至るところで疲弊、混乱していたのです。1章2-4節で語られる当時の様子。「暴虐」「災い」「労苦」「破壊」「争い」「いさかい」、と、矢継ぎ早に、厳しさを示す言葉が紡がれていることから、相当の過酷さであったことがわかります。誰もが、物質的にも、身体的にも、精神的にも苦しい生活を強いられ、常に不安にかられていた。そして、国を維持する骨組みとなるはずの法律がもはや意味をなさなくなり、善悪の基準が揺らぎ、国家が国家としての体裁を保てなくなっている。自分自身がその現場に生き、自分を含めた国民の状況をつぶさに見ていた預言者ハバククは、神に思いをぶつけます。「なぜなのか。この状況はいつまで続くのか。」

本日の御言葉として与えられた後半部分。2章2-4節。ハバククの訴えに対して、神は答えます。「幻があたえられる。終わりのときをもたらずその幻を、あなたたちが見るとき、これまでに不正を働いていた者たちの心は糺され、人々は信仰によって正しく生きるようになる」。「信仰によって生きる」という2章4節の言葉は、新約聖書において引用され、そこで展開される思想に大きな影響を与えたものです。特に、パウロは、ローマ、および、ガラテヤの二つの地域の信徒にあてた手紙の中で、この言葉を直接に引用し、またその言葉をもとに、新しい神学思想を打ち立てています。みなさんも、一度は聞いたことがあるかもしれません。「信仰義認」という考え。これまでに、ユダヤの伝統や宗教規則に適った生活をしたことのない人、あるいはその伝統や宗教規則そのものを知らない人であっても、神を、その神がこの世に送ってくれたイエスを信じることによって、人は誰でも、神に愛され、神の前に正しくされる。「信仰によって生きる」表現としては単純です。教会にしばらく通っている人なら、馴染みのあるフレーズかもしれません。ですが、困難な時代状況にあって、「信仰によって生きる」とだけ言われても、首をかしげたくくなります。具体的にどうすれば良いのか。そもそも、信仰とは何なのか。その信仰によって生きる、

とは。本当にそれで、苦しい状況から抜け出せるのか。苦しみは無くなるのか。

ここで、ハバクク自身の言葉に着目します。1章2節。ハバククは「見る」という意味を持つ言葉を、3度繰り返し用いています。聖書協会共同訳では、順番に「見張り場」、「見張り」、そして「見る」と訳されている言葉。ヘブライ語原文をたどると、この3つはそれぞれに異なる単語が充てられています。ここには、話者であるハバククの、特別な思いが込められているように感じられます。さらっと目を通すのではなく、しっかりと見る。確認する。納得するまで確かめる。何を確認するのか、というと、「主が語ること」「主が答えること」。つまり、ハバククは、自分の訴えに対して、神がどう答えるか、どう応答し、どう行動するかを、十分に納得いくまでしっかり見てやる、というのです。自分で「そうだ」と思えるまで、神に問い続ける。向き合い続ける。それは、ある意味で、神に対して疑いを抱くことであるようにも思えます。そして、「神を疑う」というのは、「信仰」とは真逆のあり方のようにも感じられます。

ただし、ハバククのあり方としては、この姿勢は、徹底されたものでした。本日の箇所の前半部分1章2-4節には、ハバククが神に向けた言葉が記されていますが、これを含め、ハバククは2度にわたり、自分の思いや感情、あるいは考えを、隠すことなく直接に神にぶつけています。一度目の訴えに対する神の答えが1章5-11節に記されていますが、ハバククはその答えに満足せず、再度、思いをぶつけているのです。ハバククの二度目の訴え。1章13節。「あなたの目は悪を見るにはあまりに清く、労苦を見ることに耐えられません。裏切り者に目を留めながらなぜ黙っておられるのですか。悪しき者が自分より正しい者を呑み込んでいるのに。」ユダヤの伝統的な思想においては、たとえば「箴言」や「ヨブ記」に描かれるように、神は勧善懲悪の存在でした。悪を行う者には罰を、善き行いをする者には祝福を与える神。その姿が覆されることは決してない。正しき人が苦しみのうちに生き、命を落とす。逆に、悪しき人がその悪を改善されずに、のうのうと生き延びる。そんなことはありえない。ハバククは、疑問を突きつけます。それなら、なぜ、今のこの状況なのか。伝統の描く通りの神なら、なぜ悪しき者が正しき者を取り囲み、裁きが曲げられ、悪人が善人を食い物にしている状況が続いているのか。明示されてはいませんが、おそらく、ハバククは胸の奥で思っていたことでしょう。「神よ、あなたはいったい何をしているのか」。蓄積される不平と不満。ハバククは、現実社会で、自分の目で見えていたのです。人々の悲惨な状況を。善悪の基準が崩壊し、それまでに拠り所としていたものが崩れ去る社会のなかで、その影響を最も大きく、多く受けていた人たち。地位も、財力も、権力も持たず、大きな声をあげることができず、人としての人格さえ削り取られていた人たちの存在。だからこそ、ハバククは神に向かって言い放ったのでした。あなたを「見張る」、あなたを「見る」。自分の目を見開いて、耳をかつぽじって、神が言うことが正しいのか、理に叶うものなの

か、その真偽を自分の目と耳と心と魂で、自分のすべてを用いて確かめてやろう、しっかりと見極めてやろう。それに対して、神は答えました。ハバククの訴え、挑発、あるいは挑戦とも言える言葉を受けてなお、答えることをやめない神。その神が示す「信仰によって生きる」という姿。ハバククと神とのやり取り全体を通して考えると、ここで神が語る「信仰」について、一つの見方が浮かび上がってきます。信仰とは、神の言葉を単純に受け入れることではありません。これまでの伝統、神学、教理、あるいは教則を、何の反省もなく受け取ることもありません。むしろ、自分の感覚で、それまでの伝統や宗教規則を問い直してみる。それらによって伝えられる神の姿ですら、疑い、問い直してみる。現状に甘んじるのではなく、不格好でも、行儀悪くてもよいから、問いを発し、現状を変えるための一歩を踏み出す。

聞き分けが良くて、行儀が良くて、おりこうな人。それこそが、立派な信仰を持った人の姿だ、と言われることも、自分で思うこともあるでしょう。でも、「これまでの当然」がますます通用しなくなりつつある世の中で、「信仰に生きる」ということの意味と意義が、改めて問い直されているように感じられます。教会の「普通」や「常識」的な考えからすれば、聞き分けが悪く、行儀悪く、愚かなのかもしれませんが。それでも、この時代だからこそ、わたしは、ハバククのように、自ら神に向き合い、その時に抱く思いや感情を大切に、それを神に投げたいと思います。誰かに言われた神を求めるのではなく、自分が出会った神と向き合い、語り合い、ぶつかっていく。具体的にそれがどういう形になって人生の歩みの表面上に出てくるのかは、今この時点で、一概に言うことはできません。それを皆さんに提示して、「これこそが信仰に生きる姿だ!」と声高らかに伝えることもできません。それは、これからの一つ一つの歩みのなかで出会う神との関係において、見出し、確立していくものなのでしょう。わたしは、その歩みをなしていくために、神の御子イエスが整えてくれているのが、教会という場であり、空間なのだと信じています。約 500 年前の明日、1517 年 10 月 31 日。キリスト教の歴史の方向性を大きく変える出来事が起こりました。宗教改革。これまで、教会で、特にヨーロッパ諸国を中心に広がっていたカトリック教会で当然とされてきたもろもろのことが、180 度覆されたのです。「ハバクク書」に記された「信仰によって生きる」という言葉をもとに、信仰義認という考えを展開させたパウロの手紙に新しい光が当てられ、わたしたちが今集っている久宝教会もそのひとつであるプロテスタント教会が形成されていきました。あのときに、当然が覆されたからこそ、わたしたちの今がある。信仰とは何か。キリストを信じて生きるとはどういうことか。容易で安直な答え、使い古されて人々に命を与えることのなくなった答えはいりません。変化に富み、命に満ち、様々な異なりを良しとする、信仰のあり方。これからも、皆様と共に求め続け、そして、現実の世界で、実際に、その信仰に生きる歩みをなしていきたいと願います。